

第3章 初めての試合

キャプテン谷口にとって最後の夏の大会はもうすぐはじまろうとしている。きょうはその一回戦の組み合わせが決まる日である。

3・1 一回戦は江田川中

地区大会の一回戦の対戦校を伝えるに二年生が走っていく……

二年生「伝令、伝令！ キャプテン地区予選のあいて校がきました！」

加藤「どこだ、どこだ？」

二年生「第一戦はなんと江田川中です。」

小山「な、なんだって。」

島田「ほんとかよ！」

部員「うほーっ、やったぞ！ こいつは春からえんぎがいいぜ。」

谷口「どうということなの？」

二年生「まるで、まるで、あいてじゃないの。なにせこれまで9回やってうちが全勝してるんです。」

加藤「それもコールド勝ちがなんと8回ですよ。」

小山「問題じゃありませんよ。」

谷口「ほっ。」

部員「なんだかきがぬけちゃったな。」

部員「ほんと。」

部員「ああ。」

丸井「キャプテンこういうときこそしめなくっちゃ！」

谷口「う、うむ。あいてがどんなチームだろうとゆだんはいけない、さあみんな練習、練習！ これからシートノックをする。さあさあはやく守備について！ いいかなーっ。」

丸井「あ、あのうノックはぼくが……」

谷口「ぼくの守備練習はすんだしいいじゃないかたまには。」

丸井「し、しかし……」

島田「お。おい。」

松下「うむ……」

一年生A「おい、ひさしぶりにキャプテンのノックがみられるぞ。」

一年生B「うん！」

丸井「お、お、お、おまえらボヤボヤしていないで草むしりをしないかっ。」

一年生C「もう、むしる草なんてありませんよ。」

丸井「じゃあタマひろいだっ。」

一年生A「人づかいがあらいなあ。」

谷口「そういう丸井は守備につかないのか？」

丸井「いいんです、ぼくは、それよりキャプテンおつかれになったらいつでもかわります。はいっ。」

谷口「いくぞっショート！」

前回とはちがいカキーンと音をたてて谷口の打った打球がショートにいった。部員全員その上達ぶりにおどろいていた。

遠藤「どういうことだ？」

小山「さあ……」

丸井もまた前回のノックのことがあったので、谷口の横に立ってノックを見ていたが、その上達ぶりにはおどろいてしまった。

丸井「……あれなんだな、まえのキャプテンが谷口さんをえらんだ理由は…」

ふと気がつくときバックネットうらに對戦が決まった江田川中の野球部員の姿を丸井が見つけた。

丸井「みろよ！」

小山「江田川中じゃん。」

松下「敵情視察ってどこだな。」

加藤「いっちょカッコいいとこみせてやっか！」

丸井「あ、それいい。」

丸井「な、なんだあいつら……、いまあの連中へんなわらいかたしなかったかい……？」

高木「あ、ああそういやあ……」

丸井「ちえっ……こそそとムシのすかねえやつらだ！」

高木「試合でコチャンパンにやつつけてやつからなもう！」

3・2 試合前

さていよいよ地区予選の幕がきつておとされました。谷口君がキャプテンになってはじめての試合がおこなわれるのです……。

グラウンドでは江田川中が試合前の練習をはじめた。

「ほれ！」

「オーライ！」

「ガチン！」

「いてえな、このーっオーライっていったじゃねえか！」

「なにを、てめえオーライっていつてとったためしがあんのか！」

「あつ、このーでつかい声で……」

「バ、バカやめろ、みつともない。」

墨谷中のナインはベンチであきれたかおで江田川中の練習をみている。

松下「やれやれ。」

高木「やつら、あれでやる気あんのかねえ……」

丸井「こりや三回でコールド勝ちですなキャプテン！」

谷口「そうかなあ……、おれにはよゆうがあるようにみえるが……」

丸井「キャプテン、それは考えすぎですよ、へんにしんちようだなあ。」

谷口「ま、はじめての試合だからな。」

丸井「やつらは試合をなげているんですよ、いつもあの調子なんスから。」

そのとき江田川中の練習ボールが墨谷中ベンチにころがってきた。

井口「わりいわい。なんでえイガラシじゃねえか！」

イガラシ「やあ！」

井口「ひさしぶりーっ、へーっおまえ墨谷第二にはいったのか、あれなにやってんの？」

イガラシ「みりゃわかるだろう。」

井口「バットみがきなんてあとにしるよ、ひさしぶりにあったんじゃねえか。」

ずうずうしくベンチにはいりこんでイガラシと話をする江田川中の井口だったが、墨谷中ナインのつめたい目にきがついた。

井口「まじかったな、じゃ…、みなさん、おれが投げっからよろしくな。」
松下「まったく、しつけないやつだ。礼儀をしらんらしいな、おまえの先輩は。」
イガラシ「同級生ですよ。」
加藤「なんだ？……あ、チクシヨウ。」
松下「あれが一年生の態度かよ、じょうだんじゃないぜ一年生が投げるなんて……」
イガラシ「一年生だって力があれば投げさせてくれるんですよ、あの学校はね。」
松下「なにが いい なんだ。」
丸井「まあまあ、こいつのひがみつぽいのは、いつもなんスよ。」
松下「しかし江田川もおちたもんだ、一年生に投げさせるなんて。」
丸井「まったく。」
イガラシ「しーらねっと…」

3・3 プレイボール

試合前の練習がおわりとうとう試合がはじまった。一回の表は江田川中のこうげきからである。江田川中のバッターは墨谷を研究してきたらしくかなりいいあたりをするが、墨谷の守備のすばらしさもあり三者凡退でおわった。

そして一回の裏、今度は墨谷の攻撃である。江田川のピッチャー井口の投球練習がはじまった。井口のタマは速いことは速いがキャッチャーのミットになかなかボールがはいらない。

遠藤「あーあー…」

松下「どうにもこうにもひどいねーっ…」

高木「いいか、じっくりえらんないけ！」

島田「えらぶもなにもバットをふらなきゃフォアボールですよ。…でももしあたったら…」

審判「プレイボール！」

井口の一球目はまともにバッターのからだにあたった。トップバッターのライト島田はそのばにたおれこんでしまう。ベンチから谷口がすぐにとびだした。

島田「ううう……」

谷口「だ、だいじょうぶか？」

島田「え、ええ。」

審判「テ、テイクワンベース。」

遠藤「ほんとにだいじょうぶかね、あいつ。」

松下「う、うむ。」

高木「じょ、じょうだんじゃない、あ、あんなはやいタマぶつつけられちゃ、まっただもんじゃない。」

二番打者はショートを守る高木である。バッターボックスにはいる前からややしりごみをしている。

高木「きたっ！」

審判「ストライク！」

高木「いけね！」

二番打者のショート高木にたいして井口の一球目はどまんなかのストライクだったが、高木は井口が投げると同時にバッターボックスからとびだした。

谷口「タ、タイム、どうしたんだよ。」

高木「だ、だってあんなはやいボールぶつつけられたら……」

谷口「あのぐらいのボールでにげちゃダメだよ。」

高木「は、はい。」

井口の二球目はともないボールでこんどは顔にぶつけてしまう。高木ははなちをだしながらも一塁へむかう。三番はピッチャーの松下である。

松下「ど、どうなってんだあのピッチャー。」

谷口「そんなにさがっちゃ打てないよ。」

松下「ぼくにもぶつかれていうんですか。」

谷口「……」

松下「い、いけね、チクシヨウどまんなかかよ！」

審判「ストライクバッターアウト！」

松下「す、すみません。」

谷口「さあ、こいっ」

ワンアウトランナー一塁、二塁、バッターは四番の谷口である。谷口はみんなにてほんをしめすためにややまえかがみになってバッターボックスにたった。そのときである、墨谷ベンチがなにやらさわがしい。松下がイガラシにむかっておこっているようである。

審判「タイム！」

松下「このやろういわせておけば。」

丸井「やめろよ試合中だぞ！」

谷口「なにをやってるんだっ」

丸井「イガラシがわるいんすよ、一年生のくせにすぎたことをいって。」

谷口「とにかくみんなベンチにはいれ！　なんていったんだイガラシ？」

イガラシ「ボールに手をだすなっていったんです。」

松下「あ、てめえデッドボールになりやいっていったろ！」

イガラシ「だって……キャプテンやつはいつもたちあがりがるいんですよ、しかし

いまあの速球をビシビシきめてきますよ！」

松下「そうしてほしいよまったく、あんなにみだれちゃまもしれねえや。」

浅間「なっ！」

イガラシ「ハハハ……そりやいかった、いかった。」

松下「……」

部員「……」

イガラシ「あのねえいいたかないけど……やっぱりいまのうちにデッドボールでもなんでもいいから得点をあげておいたほうがいいんじゃないですか、あんなたち

の力じゃとても打てませんよ。い、いけね。」

松下「ほら、これなんすよ。」

審判「きみたちどうしたんだね。」

谷口「すみません。」

審判「プレイボール！」

井口の谷口への一球目はまんなかきた。谷口は思いっきりバットをふるがバックネットにぶつかるファールになってしまった。谷口の手にはしびれがのこり、井口のタマが速くておもしろいことをかんじとった。谷口は二球目をレフト前にクリーンヒットするも、墨谷の走塁ミスと江田川の外野からのボールを中継したピッチャー井口の好判断でダブルプレーとなってしまふ。

審判「アウト！　チェンジ！！」

高木「や、やるなあ、あのピッチャー。」

島田「う、うむ。」

谷口「みんななめてかかったやダメじゃないか！」

高木「すみません。」

谷口「いま打ってみてわかったんだが、きみたちが考えているようなピッチャーじゃないぞ。イガラシがいつてたようにもしあのタマがきまりでしたら、きみたちには打てないよ。いいかつぎの回からはイガラシの忠告どおり、デッドボールでもなんでもいいから得点をあげるんだ！」

部員「……」

谷口「さあ、がっちりこうぜっ！」

部員「……」

ナインは元氣なく守備につく。この回江田川中は四番からの攻撃でバッターは井口だった。それをみてベンチにいたイガラシはタイムをとり、サードを守る谷口のところへかけより敬遠したほうがいいとつける。ナインはマウンドにあつまってきた。

谷口「ちょ、ちょっと、あのバッター敬遠しよう。」
松下「け、敬遠……」

丸井「よ、よしでしょうよ、江田川あいてに敬遠なんて。」

谷口「しかしかれには一発長打があるらしい……」

松下「それもイガラシの忠告ですか……」

谷口「なにをいつてる、かれをいちばんしっているのはイガラシじゃないのか！」

部員「……」

松下「わかりました。敬遠すればいいんですね。」

谷口「い、いや敬遠しないまでもいちおうくさいところについてみてよ、くさいとこね……」

松下「はあ。」

審判「プレイボール！」

松下「やれやれなんだって一年生のいうことにいちいちふりまわされなきゃなら
ないんだ。いいかようくみとけっ！」

イガラシの忠告でマウンドにかけよったナインだったが。ナインのイガラシにたいする反感は予想以上で谷口はあいまいな返事でサードにもどった。

ピッチャー松下が井口にむかって投げるが、ワンストライクをとったあとの二球目をライトスタンドにはこぼれホームランとされてしまった。谷口はドンマイドンマイと松下に声をかけるが、これは自分の責任だもつとはつきりと敬遠しろというべきだったと後悔する。キャプテンがあいまいな態度じゃいけないと気がついた。

しかし谷口がそれに気づいたときはすでにおそかった。江田川のピッチャーは予想いじょうにたちなおりがはやく、イガラシの忠告どおり豪速球をきめはじめた。いっぽう墨谷二中も一点こそゆるしたもののていねいなピッチングと好守備でそれいじょうの追加点はゆるさなかった。

3・4 最終回の攻撃

審判の声が高くひびいた。「ストライクバッターアウト！」

部員A「こりゃ、いよいよダメだな……」

部員B「まさか予選の一回戦でつぶれるとは……」

井口「へっへへへ、あとふたりね。」

審判の声が高くひびいた。「ストライク！」

谷口は自分の決断力のなさをこうかいしていた。そしてベンチでなにかうつてはないものかと考えていた。弱気になるな！ なにかないか！ なにか！

イガラシ「あーあ、どうでもいいけどみじめだねえ、二回から塁にでたのはキャプテンと左の加藤さんだけでもんな。」

部員「……」

イガラシ「い、いけね、またいっちゃった。」

谷口「……」

谷口が何かに気がついたように顔をあげイガラシの方をむいた。

審判の声がまたひびいた。「ストライクツー！」

谷口「タ、タイム！ ちょっとバッター！」

井口「どったのバッター、いまさら往生ぎわがわるいんじゃない。」

高木「わかりました。」

谷口「たのむぞ！」

井口「……」

遠藤「あれ……、左にたっちゃった。」

イガラシ「な、なるほど。」

丸井「どういうことなんスカキャプテン？」

イガラシ「まあ、だまってみてなさいよ。」

井口「……」

左にたったバッターになぜか井口は投げにくそうである。ボールがふたつつづく。

遠藤「どういうことだ急にみだれだしたぞ……」

丸井「う、うむ。」

谷口「どうして左だとコントロールがみだれるんだ？」

イガラシ「むかしからあれがやつの弱味なんですよ、しかしちょっとおそすぎたかも……」

審判「ストライク、バッターアウト！」

イガラシ「ねっ。」

谷口「きみも左にたつてくれ。」

松下「は、はいっ！」

審判「デッドボール！」

松下「おーいてて……」

部員「やったーっ、チャンスとうらい！ キャプテンたのみますよっ！」

父「がんばれタカオッ！」

谷口「と、とうちゃん！」

父「勝つも負けるもおめえの一打にかかっているんだぞっ、ここでおまえがうったらとうちゃん、タイやきでもカツ井でもおめえのすきなものハラいっばいくわせてやるぞっ！」

谷口「よ、ようし、みててくれとうちゃん！」

ベンチとスタンドからの声援をせなかにうけ谷口は右打席に入った。江田川のエース井口との勝負である。ランナーの松下に盗塁のサインをおくった。守備の悪い江田川の弱点をつくためである。

「ストライク！」

江田川バッテリーはランナーには目もくれず、バッターのみに集中した。

「ストライクツーッ！」

そのあいだにランナーは三塁まですすんだ。次の球が勝負球である。

井口は全力の豪速球を投げた。カーン、谷口のバットから快音が聞こえボールはグイグイのびていく。「やった同点だ！」ベンチからスタンドからいっせいに声があがった。ボールは右中間をてんでんとしライトとセンターがボールをおう。外野から内野にボールをもどそうとしたとき中継ミスもあり、谷口は三塁をまわってホームをねらう。ボールがホームにかえってきた。谷口がすべりこむ。判定は？

「アウト！！！」

審判の声がひびいた。ところがキャッチャーのミットからボールがこぼれおちている。

「いや、セーフ！」

こうしてなんとかキャプテン谷口にとつての地区大会一回戦は勝利をおさめた。一試合終わって谷口はからだのつかれよりも、キャプテンとしてチームをまとめていかなければならない精神的なつかれをかんじていた。

3・5 試合後のミーティング

小山「では、きょうの試合の反省会をはじめ。まず感想をキャプテンからおねがいします。」

谷口「こ、こまったな、にがてなんだよこういうの、えー…みなさんのおかげで初めての試合に勝つことができました。」

谷口「でも一年生のイガラシくんのアドバースがなかったら勝てなかったとおもいます。ほんとうにありがとうございます。」

イガラシ「お礼なんていいですよ、それより試合にだしてほしいですね。」

谷口「いいとも、力さえあればいつでもだしてあげるよ。」

一年生A「試合だってさ。」

一年生B「いいなーっ。」

イガラシ「草むしりやタマひろいしかさせてくれないのに、どうして力がわかるんですかね。」

谷口「なかなか自信があるな、その気があるならいつでもみてあげよう。」

一年生A「あ、あのうぼくたちもいいですか？」

谷口「いいとも！」

一年生A「お、おいっ！」

一年生B「うん。」

谷口「がんばれよレギュラーになれるかもしれないぞ。」

一年生B「そりゃがんばりますとも！」

一年生C「なっなっ。」

松下「ちよつとまってください。キャプテンは途中から転校してきたからごめんじなとおもいますが、一年生はたとえどんなにうまくても九月まではレギュラーとしてつかわないという規則があります。」

谷口「どうしてなんだ。みんなこんなにやりたがっているのに。」

島田「その期間はチームになじませるということとどうじに基礎体力づくりをする事になっていてこれなのです。それにまだ一年生ではわれわれのレギュラー練習にはついてこれないとおもいます。」

イガラシ「やってみなくちゃわからないでしょ。」

島田「な、なんだとこいつ。」

谷口「ちよつとまでよ………だけど江田川のピッチャーは一年生だったじゃないか。」

高木「あれは例外ですよ。」

浅間「からだつきからしてちがうじゃないですか。」

イガラシ「ハハハ、野球ってからだつきでするんだって。」

浅間「こ、こいついわせておけば！」

高木「よせ、かまうな！」

谷口「きょうの江田川をみておもうんだが、一年生にチャンスにあたえてやってもいいんじゃないか。」

小山「かりに一年生の中にレギュラーになれる者がいたとしても、いまから特定の人間をつくってはなにかとチームワークづくりに支障をきたすとおもいますが………とくにいまはチームワークづくりにたいせつな時期ですからね、なんといつてもうちのばあいチームワークのよさが原動力だとおもいます。」

谷口「……」

小山「いえ、もちろんそれはキャプテンがきめることですけど。」

谷口「考えさせてくれ……」

3・6 帰り道で

谷口「……」

丸井「いよいよだめになっちゃった。みてください…これ。」

丸井はこわれたグローブをたたきながら谷口のほうをのぞきこむが…

谷口「……」

丸井「まだ考えてたんスカ。」

谷口「丸井はどうおもう？」

丸井「そりゃ九月までまったほうがいいとおもいますね！」

谷口「そうか…」

丸井「まあ、もつとも責任のない立場ですからぼくは…でもやっぱりうちのぼあいチームワークが主体ですからねえ…とくにイガラシみたいのがレギュラーになったら問題ですよ。」

谷口「なぜだ…？」

丸井「あいつ、先輩なんてへともおもちゃいないんすから！ それにひがみつばいし口のききかたさえしらないんすからね。」

谷口「たしかに口はわるいな。」
丸井「そうおもうでしょ、ねっねっ、ぼかあきらいだなあ、ああいうの、サルといおうかラッキョといおうかかわいげのない顔しちゃってさ、あいつをみるたびにひっぱたきたく…」

そのときだった、丸井と谷口が話をしている横をイガラシが通りすぎていく。

丸井「で、でもあれでかわいいところあんだな、すぎだよぼかあ…」

丸井は谷口に話したつもりのイガラシの悪口をとりつくろうとしていた。

丸井「き、きこえちゃったかなあ…」